

多文化・共生コミュニケーション論叢

第8号



フェリス女学院大学 多文化・共生コミュニケーション学会

2013年3月

バンラデシュでの異文化体験がひらく学生の気づき —体験の言語化のプロセスからみた「ふりかえり」の重要性

東 宏 乃

バングラデシュでの異文化体験がひらく学生の気づき ー体験の言語化のプロセスからみた「ふりかえり」の重要性

コミュニケーション学科非常勤講師 東 宏 乃

1. はじめに

2013年2月17日(日)~3月2日(土)(13泊14日)、筆者は、フェリス学院大学の授業『アジアとの出会いと異文化体験ーバングラデシュの生活文化とフィールドワークⅡ』の海外短期研修として、6名の女子学生をバングラデシュに引率した。

授業は2012年度後期の開講であったが、研修の説明会は2012年4月に行っていた。ここでは、参加学生6人の内、最初の4月の説明会から参加した2人の学生、コミュニケーション学科2年のLと、国際交流学科1年のMに焦点を当て、バングラデシュでの異文化体験が彼女たちにどのような影響を与えたのかについて論じていきたい。

特に、世界銀行の経済指標では人口の76.5%が1日2ドル以下で暮らし(*1)、国民の89.7%がイスラム教徒(*2)であるバングラデシュでの体験は、日本の日常生活と比べ異文化体験であり、彼女たちの中では、自分自身のことや日本の生活を見直す体験となっており、筆者は本論で、異文化体験が彼女たちに内省的な気づきを促したプロセスについて考察を加えていく。

(学生の学年は2013年3月現在として記載。)

2. 海外短期研修の内容

この海外短期研修についての学生レポートを含む報告書は、『目に見えない豊かさ』を知って。』(*3)と題され2013年3月下旬に発行し、5月下旬には筆者の個人的なWEBサイトにも掲載したので、詳しい旅程についてはそちらを参照されたいが、内容を概括すると以下のものであった。

(1)【1日目】成田空港出発→香港空港乗り継ぎ→バングラデシュ国・ダッカ空港着。

朝、成田空港に、2011年2月の研修に参加したK(コミュニケーション学科3年)が見送りに来てくれた。「バングラデシュの良さは何か?」と参加学生に問われて、Kは、「人です。ベンガル人は優しく、人としてとても温かい」と答えた。

乗り継ぎの香港空港での待ち時間を使い、バングラデシュ研修への期待を中心に簡単なレポートを書く。

(2)【2日目】首都ダッカの高級住宅街のホテルに滞在し、午前中に市内の中規模の縫製工場を見学。午後は、世界最大のNGO・BRAC

が経営するフェアトレード店 ARONG 等で、学生は自分がバングラデシュ滞在中に着るための民族衣装(サロワ・カミューズ)を購入。
(3)【3日目】早朝、ダッカ市南部のスラム街と卸売市場カオランバザールを見学。その後、ノルシンディー県へ車で移動。ベラボー郡の地元NGO・PAPRIの事務所に到着し昼食。

午後、農村開発プロジェクトについてのレクチャーを受け、夕方、ナラヤンプル村に行き、思春期特有の保健衛生や女性の人権などについて学び、村で社会貢献活動を行う少女グループ「キシュリ」と出会い交流する。夕食前、PAPRI代表のバセットさんから、「より貧しい人への支援、支援が行き届かない人への支援」についてレクチャーを受ける。

(4)【4日目】早朝、ナラヤンプル村の隣のアムラボ村の朝市に散歩に出かける。朝食後、マイクロクレジット(小規模無担保貸付)で生活向上を行う農村女性の相互扶助グループ「ショミティ」の定例ミーティングを見学し、その後交流。

マイクロクレジットを使って成功した、村の雑貨屋経営・畑のインゲン豆の増産・電動力車を持っている家などを短く訪問し、PAPRIの事務所に戻って昼食。

午後、首都ダッカに向けて、車で移動。首都ダッカの渋滞にはまる。

(5)【4日目】夕方、首都ダッカの旧市街地にある地元NGO「オボロジェヨ・バングラデシュ」が運営するストリート・チルドレンのドロップ・イン・センター(一時庇護所)を訪問し、ストリート・チルドレンの文化プログラムを見学した後、子ども達と交流(2時間半)。

(6)【5日目】早朝、ショヒドミナールで行われる「言語運動記念日(=国際母国語デー)」の式典への参列とダッカ大学で行われていた「図書祭り(ボイ・メラ)」見学(3時間)。

(7)【5日目】昼前、タンガイル県へ移動。昼、地元研究団体「UBINIG(ウビニック)」のゲストハウスに到着、昼食。午後、UBINIGの農村開発プロジェクトで、無農薬栽培に適した在来種を保存して貸し出す種子銀行(seeds bank)や、伝統的な製法で行うポップライス作りを見学し、たくさんの鳥の鳴き声が聴こえるムハマッドプール村を散策。

夕方、UBINIGの活動に参加している農民が出演する文化プログラム(滑稽劇と歌)を鑑賞。夕食後、UBINIGの代表のシャミン氏よ

リレクチャーを受け、学生は、世界には「目に見える豊かさ」と目に見えない豊かさ」との両方があることに気づく。目に見える豊かさとは、世界銀行の援助などで行われる橋や道路というインフラの整備で、目に見えない豊かさとは、作物の在来種に関する農民の知恵や伝統織物の技術、生活文化などを指す。

(8)【6日目】早朝、村の朝市を見学。朝食後、アティア・モスクを見学、通訳のアラムさんにイスラム教のお祈りの前に行う顔や手を洗う方法を見せてもらう。昼前、無農薬栽培を行い、村の中の種子銀行(seeds bank)を管理している、マイヌッディンさんとリナさん夫妻の農家を見学・交流。マイヌッディンさんのような中規模農家は 500 世帯程にも広がったという。米・油・野菜・ハーブ・果物など 200 種類の作物を有機栽培し、余剰は市場で販売し現金収入とし、3 人の子どもたちには高等教育を受けさせたとのこと。

(9)【6日目】午後、家内製手工業的にタンガイル織りを生産している家を数件訪問。また、2011 年度にデザイン賞を受賞したカティック・バサックさんの工房を訪問。タンガイル織りの中でも、地元で古くから伝わり復刻したジャックワード織(日本ではジャカード織と呼ぶ)という、絵柄を織り機にかけるパンチング技術を見学する。繊細な布地と大胆な絵柄に魅了され、タンガイル織りのサリーを学生全員が購入。その後、伝統的な自然染色を体験して、夕方は休息。夕食後は、ふりかえり。

(10)【7日目】早朝、UBINIG の文化プログラム(詩聖ラロンの歌など)に参加。朝食後、UBINIG が最初の事務所を置いた地域であるシキポリ小学校へ行き、葉っぱ細工と折り紙、縄跳びなどで小学生と交流。昼食はベンガル料理を伝統的な給仕の仕方でもいただき、午後はダッカへ移動。早めにホテルに入り、翌日から 3 泊 4 日する南西部のジョソール県の村へ行く準備をする。

(11)【8日目】「ホッタール(政治的デモ・ストライキ)」の影響を避け、かなり早朝にダッカのホテルを出て、ムンシゴンジ県のマワ橋(建設予定地)より、伝統的帆船 PANSI・NAO 号に乗りガンジス河をクルージング。同じくホッタールの影響を避け市内観光を止めた、大阪大学の一行と船の上で交流。途中、中洲の 2 つの村に寄る。午後、対岸のフォリドプールに着き、カルナガットの渡し場で休息し、ジョソール県に向けて車で移動。夜、サティアントラ村のコミュニティーリーダーのトゥヒンさん宅に到着。歓迎を受け、3 泊 4 日のホームステイへ。

(12)【9日目】朝食の後、手作りの村の地図を見ながら、村をフィールドワーク。ジョソール県で伝統的に行われている刺繍布(カタ)を作る女性達との短い交流。イスラム教徒とヒンズー教徒が共存する村の複数のコミュニティーリーダーへのインタビューや、農村女

性が参加する国際 NGO・BRAC のマイクロクレジット活動のヒアリング。水浴び体験。夕食後は、トゥヒンさんの長姉の娘さん(11 才)が唄う歌を聞いて文化交流。さらに、トゥヒンさんの奥さんに、典型的な農村女性の一日の暮らしについてヒアリングをする。

(13)【10日目】早朝、村の端の池でヨガ・瞑想体験。村長を 6 期 30 年務めたウッドディンさんにインタビューをして、朝食。午前中は、10 日間のフィールドワークのまとめのワークショップ。手法は、3 人ずつ 2 班に分かれてダイヤモンド・ランキング、ワークショップの課題は「バングラデシュの良さ」。浮かんできたテーマは各班各々「For Others」と「自然が生んだ豊かさ」。午後は、タンガイル県で買った、既婚女性が着る民族衣装のサリーを着て、村のクリケット場とバザール(市場)を散策。夜は、トゥヒン家の子ども達とも思い思いに交流。

(14)【11日目】朝食後、トゥヒンさん一家とお別れをして、同じジョソール県のレプトラ村に移動し、伝統的な刺繍布(ノクシ・カンタ)を生産する女性の家を訪問しヒアリング。近所の女性達が刺繍する様子も見せてもらう。ジョソール県から首都ダッカに戻る途中、ガンジス川の川べりに待っていた PANSI・NAO 号の上で、ダッカ大学日本語コースの女子学生 6 人に迎えられて、交流ワークショップを行う。(YES/NO クイズの後、「バングラデシュの良いところ」について日ノ混合で 6 人ずつ 2 班に分かれてダイヤモンド・ランキングと描画によるまとめ)(4 時間)。対岸に着きダッカ大学の学生と別れ、翌日に行われるホッタールの影響を避け、途中スリナガル村で時間調整をし、ダッカ市のホテルに車で戻る。

(15)【12日目】「ホッタール」発生のため午前中はホテルで休養。昼前、通訳のアラムさんの家族も交え、高級住宅街であるグルシャン地区の、フェアトレードショップ ARONG と高級スーパーマーケットで買い物をし、ビリヤニ屋で昼食。

(16)【12日目】夕方、ホテルの会議室で「ふりかえり」のワークショップと中間レポート書き(3 時間)。これまで組んだことのないメンバーで 3 人ずつ 2 班に分かれ、ブレイン・ストーミングの後、マインドマップを描きながら、まとめる。出てきた結論は、「バングラデシュの豊かさ」をテーマに議論したチーム・ピタ(ピタは伝統的なお菓子の一種)は、「豊かな自然が豊かな文化を生み、人々の生活・心を豊かにしている。」「For Others」をテーマに議論したチーム・カチャモリス(カチャモリスは青唐辛子の意味)の結論は、「分けへだてなく相手を想い、行動することができる。それを態度と言葉で(あたり前に)表現してくれる。心から相手をもてなしてあげたい気持ちが基本。その連鎖反応が、目に見えない豊かさで、それは相手のため。」となった。

(17)【13日目】午前、首都の旧市街地オールドダッカの観光で、働くストリート・チルドレンと遭遇し、短くインタビュー。その後、最新のショッピングセンター「ボシュドラシティ」見学。通訳のアラムさんの自宅で伝統的なベンガルの家庭料理の昼食。

午後、JABA tour のオフィスで荷造りをし、帰国の途へ。

(18)【14日目】香港を経由し、翌日午後成田空港着。解散。

3. 学生の「ふりかえり」

研修は、多岐にわたり、なおかつ内容が濃い。体験したことが消化不良を起こさないように、移動中の渋滞の車の中や、夕食後の歓談の時に、40分程度の時間をとって、毎日、「今の気分」と「今日一番印象に残ったこと」、「疑問・質問」について共有するようにし、「ふりかえり」とした。

実際、6日目、UBINIG のゲストハウスでの夕食の後の「ふりかえり」では、R が、「毎日インプットが多いので、このようにふりかえりをして思っていることを口に出して、みんなで共有できることは良いことだと思う。」と述べた。また、A は、「一日一日が濃いが、一番インパクトのあったことを思い出しながら眠りに就きたい」、M は、「一日にあったことを日記に書いているが、内容が濃すぎて書ききれないまま寝る時間になってしまうが、がんばりたいと思う。」と言っていた。

毎日の「ふりかえり」に加え、上記(13)(14)(16)の3回のワークショップは毎回3〜4時間かけて行なった。特に、(13)(10日目)、(16)(12日目)については、ワークショップの後に、学生は個人で「ふりかえり」をA4判1枚のレポート用紙に書いて文章化することで言語化を明確に行い、それは筆者がコピーをとって各自に返した。(おもしろかったのは、コピーを相互に交換する学生(MとS、RとY)がいたことである。どう感じたのか、自分の意見を同行者と共有したいという強い気持ちの現れだったのだろう。同行者は唯の学友ではなく、研修を続けるうちに同志になっていたのかもしれない。)

つまり、毎日、「小さいふりかえり」があり、また、10日目と12日目には、「大きなふりかえり」を行なったのである。そして、最後の「ふりかえり」は、帰国後6日目となる3月8日を締め切りとした1人で書く課題レポート(成績評価の対象となったレポート)である。課題レポートについては、「帰国後すぐに書くのではなく、2〜3日は、ぼーっとして余韻にひたり、余韻が覚めた頃に書く」とアドバイスしてあった。(実際に何時書いたかはわからないが、6人とも締切日の指定時間間際に大学の専用WEB上から提出した。)課題レポートは、テーマも題名も自由。但し、自分にしか書けない独自性のある内容にするよう示唆してあった(分量

はA4判4ページと指定)。

また、帰国後6日目に提出期限だった課題レポートは、バングラデシュに行った興奮が冷めやらない時期に書いた可能性が高かったので、2013年5月28日(火)夜、3時間程、3ヶ月弱ぶりに6人の学生に会って歓談し、「ふりかえり」を行い、簡単なレポートを書いてもらった。そのレポートも分析の対象とした。

4. 学生の気づきのプロセス

参加学生には、時に応じて、どうして参加するのか、何を自分のテーマとするのかを、私は問うた。研修に漫然と参加するのではなく、この異文化体験に主体的に関わってもらいたかったし、どの研修に力を入れるのか、旅程の部分調整にも関係していたからである。

そして、異文化体験が体験学習としてどのような意味をもつのか、筆者としても教育的観点からトレースしておきたかったので、参加学生に「問い」を投げかけ続けたのである。

6人の内、LとMを取り上げたのは、4月の説明会から参加していたのがこの2人だったからである。また、Sは、「(私が初回講義で見た写真の中の)ストリート・チルドレンの笑顔に出会いたい。」という期待をもって参加したが、最後の課題レポートに至るまで、バングラデシュの人々の笑顔についての考察が主で、異文化体験としてめざましい変化を見せなかったため、取り上げなかった。また、Aは、「ストリート・チルドレンに出会うことは怖かったけど、実際に会ったら自分でも交流できたので、(日本での)仕事にDVなどで傷ついた子どものサポートを選ぶ勇気が少し出てきた。」と、4日目の夕方のバスの中のふりかえりで涙を浮かべながら語ったが、残念ながらそう考える背景やそれ以上の詳しい想いを表出してくれなかったため、取り上げられなかった。Rは、「バングラデシュの子どもと教育問題」をテーマに参加したが、実際の研修では教育問題に深く特化できる出会いが少なく、自己理解の変容には至らなかったと思われる。ただ、Rは、文章力がありレポートは大変読みやすかったし、帰りの飛行機では、バングラデシュに行った体験をぜひ後輩にも体験してもらいたかったので、この異文化体験について発信したいと言っており、研修に充分満足していた。また、Yは、現地で会うリソースパーソンへのインタビューの時はいつも私のすぐ隣に居て積極的にノートをとったり、質問をしたり始終熱心に参加しており、課題レポートには、「NGOとマイクロクレジット(小規模無担保貸付)」について深い考察を書いてくれた。が、課題レポートと同様にふりかえりの作文も、どちらかということを中心とした記述が大半を占め、個人的な想いの変化をたどることはしにくかった。ただ、帰国後3ヶ月弱経った時に、Yは「先

生、私は学生オーケストラでバイオリンを弾いているのですが、バングラデシュに行った影響かどうか、バングラデシュから帰ってきてから聴こえる音が深くなったのです。」と喜んで伝えてくれた。異文化体験が豊かだったことを思わせる発言だが、例証するには難

しい内容なので、Yを取り上げることは割愛せざるをえなかった。したがって、学生の気づきのプロセスを追うために、LとMの、節目、節目での意思表示の抜粋を、表-1に整理してまとめた。

表-1「気づきのプロセス」

時間	L(コミュニケーション学科2年)	M(国際交流学科1年)
① 履修時の動機 (2012年10月)	私が(4月の)説明会で感動したのは、美しい民族衣装があること、女性が社会進出するために努力していることでした。今までは先進国の文化が大好きで、発展途上国についてはほとんど無知な私ですが、頑張っている女性たちから勇気をもらいたい、そこからこの私に何ができるのかを発見したいと思いました。今日(第1回目の講義)は、日本で見られないような、綺麗な風景の写真がたくさんあるな、と思いました。 <u>民族衣装を着ることが楽しみです。</u>	私は4月の時点で、NGOなどの国際的な支援をしたいと考えていたので、説明会にまず参加しました。写真を見て、海外研修はとても濃密な時間を楽しく過ごせそうだなと思いました。写真を見るだけでなく、実際にバングラデシュでの生活や現地の人、 <u>音から空気まで感じたいし、物質的な豊かさだけでなく、生活の中の豊かさを多角的に見てみたいです。</u> 今は、異文化を体験してみたいという思いが強いです。
② 最終講義で書いたテーマ (2013年2月)	バングラデシュの女性の社会進出と結婚観	女性の自立 (現地4日目の2/20のバスの中での「ふりかえり」では、自分の人間性を絶対変えて／変わって帰ると訴えていた。)
③ 1日目の香港空港で書いた「期待」	日本とは全く違う全てを自身で感じたいです、同じ生活や価値観をもてなくても、 <u>自分と違う何かを得たいです。</u> (農村)女性が社会進出に意欲を見せている、という状況であることを、少し期待しています。	授業の中で、「日本にはない豊かさ」の話をして、これは日本人なら描く途上国についての固定のイメージだと思っています。その <u>豊かさを身をもって体験</u> できることを期待しています。(先輩から)「バングラデシュの良さは“人”」というお話も聞いたのでとても楽しみです。
④ 6日目のUBINIGでのふりかえり	(UBINIGの代表)シャミンさんの、橋などの目に見える発展と、農民の知恵などの目に見えない発展というお話は、人間の場合にもあてはまると思った。目で見て着飾っている人が輝いているわけではないとも言えるからだ。 <u>目に見えない発展については、伝統を受け継いで守っていくことが発展につながっている。</u> 外見上は裕福には見えない農民の生活も、話を聞いてみると豊かだということがわかった。	シャミンさんの話で、無農薬農業の方が(近代農業より)進んでいるという話があったが、高校で習った『人類の文明は進化していく一方で、同時に退化もしていくパラドックスを抱えていく。』という話を思い出した。自分がこれまで進んでいると思っていた科学とはなんだっただろうと感じた。無農薬農業をしているマイヌッディンさんの家を見て、 <u>その日暮らしなのではなく、(持続可能な)豊かな生活だと思った。</u>
⑤ 10日目のジョソールでのふりかえり	バングラデシュは、私が育った静岡の田舎よりも自然が豊かで、その自然と仲良く共存していることが伺えた。(中略)自然が豊かなため、自然に対して素直に感謝の気持ちを表すことができる。太陽や鳥の鳴	私にとってのバングラデシュは、私が以前思い描いた理想的な社会にとっても近いと思いました。(中略)こういう生活はいいなと思ったのは、地元にあるもので生活したり、歩いて友人の家や近所の人の家まで行って、自然や

	き声や緑の豊かさに直接触れることができる。<u>バン</u> <u>グラデシュ</u>に来て一番驚かされることは、<u>バン</u> <u>グラデシュ</u>人の人間性の素晴らしさだ。見慣れない顔の 私たちに笑顔を向けてくれる。手を振ってくれる。 私たちの幸せを祈ってくれる。一体どこまで私たちが 忘れていたこと、できないこと、知らないことを 教えてくれるのだろう。触れ合う人々はみんな自分の 人生に自信をもっていて、誇りがあって、輝いて みえる。彼ら、彼女らからは権利や意思・幸福が感 じられた。私は女性をテーマにバングラデシュに來た。 私は日本での自分の生活を幸せだと思っている。<u>バン</u> <u>グラデシュ</u>の女性は幸せなのだろうか？希望を持って 生きているのだろうか？と感じてきた。<u>一言で言えば、</u> <u>彼女たちは大変幸せだった。強い意</u> <u>志があった。羨ましく思える程の笑顔で幸せだと言</u> <u>う。</u>私ももっと幸せになりたいと思った。私は私な りの最大限の幸せを手に入れて、幸せをみんなに分 けていけたら最高だと思う。	豊かな文化に囲まれて、ゆっくりと時間を過ごしたり、 身近なコミュニティや小さな社会を大切にする生活だ ったので、バングラデシュの農村に来てから、私は以前 こういう環境をずっと欲しがっていたんだと感じて、そ の時の気持ちを思い出した。(今住んでいる横浜は、隣 近所が何をしているのかもわからず住みにくいのだ が)(中略)バングラデシュの村にある、人々の寛容な心と か、<u>土地を愛する気持ちとか、和を保つための我慢とか</u> <u>が、すべて自然によって育まれたものであると、私は身</u> <u>をもって感じた</u>ので、そのパワーを再確認できた、証明 されたと思う。
⑥ 12日目の ホテルでの ふりかえり	「目に見える発展と目に見えない発展」 UBINIGを訪問した際に、シャミンさんのお話を聞 き、目に見えない発展を見聞きしてきた。ムハマッ ドプール村には、無農薬栽培やタンガイル織、伝統 的な音楽・舞踏など、古き良きものがたくさんあり、 盛んであった。(中略)私は日本で生活していて、目 に見える発展をたくさん目の当たりにしてきた。また、 目に見える発展を求めている人もたくさん見て きた。それは一種の見栄であり、人々のエゴである と、シャミンさんの話を聞いて感じた。バングラデ シュでは、新しいものよりも、大切にされ受け継が れている古いものの方が綺麗で品があって価値が あるように思えた。タンガイル織やジャムダニ織の サリーも一緒に、<u>古いものの方が ARONG で売ら</u> <u>れている流行のものよりも華やかでパワーが感じ</u> <u>られて、女性らしいと思った。</u>どんどん新しいもの が生まれる(日本)社会で、古き良きものに触れるこ とに目を向けて来なかったが、<u>古き良きものを生産</u> <u>している人々が誇りに満ちているのを見て、そうい</u> <u>う人々の支えができる人になりたいと、強く感じ</u> <u>た。</u>(中略)目に見えない発展から目を背けてはいけ	「この国のたからもの」 ブレイン・ストーミングやマインドマップを描いてい て、バングラデシュの人や環境や文化が引き起こす連鎖 反応について考えた。私が 2 週間で得たものや見たも の、知ったことはとても多い。日本ではイジメ問題が深 刻なのに、バングラデシュではそんな問題がないときい て、やはりそれは何世代にもわたって受け継がれてきた 人柄や考え方や生活の<u>空気</u>によるものだと思う。(その 雰囲気は)国の政策や経済成長によって勝ち取れるもの ではないし、日本がまねできるものでもない。目にも見 えないし、システムによって得られるものでもないの で、非常に貴重な財産だと思う。<u>バングラデシュの財産</u> <u>と言え、何が最初に浮かんできたか。今日のワークシ</u> <u>ョップをする前だったら、「人々の笑顔」とか「自然」</u> <u>「文化」と言っていたと思う。確かにそれも大事だけど、</u> <u>人々が代々受け継いできた「空気そのもの」だと私は思</u> <u>う。</u> サティアントラ村で、ヒンズー教とイスラム教が共存で けるのは、まさに、その例で、シリー・カルティク・ナ ツさんがおしゃっていた通り、祖父の代からこの村で争 いごとはなかった。その考え方や感じ方が受け継がれて

	ないと思ったのは、<u>新たな発見だった。</u>	いる証拠だと、私は思う。1年365日この空気の中で生活すればそれにみあった国民が連鎖反応を起こしているというのも納得できる。 日本に帰りたくないと感じるのも、バングラデシュの国民や生活の中に目に見えない魅力を感じているからだ。<u>日本ではこの空気を体験できない。</u>
⑦ 帰国後の 課題レポー ト	「バングラデシュで触れた自然がわたしにもたらしたもの」 (前略)バングラデシュの人々の生活の基盤である自然は、ベンガル人のみならず、わたしたちの心も豊かにした。(中略)バングラデシュで「太陽がわたしたちを照らしてくれているのです。」と聞くと、ああそうだな、太陽に感謝しなきゃな、というように素直に言葉を聞き入れることができるからだ。「あなたたちの幸せを願っているの、わたしたちの幸せを願ってください。」というような言葉も素直に聞き入れることができたのは、バングラデシュの自然に囲まれていたからこそだと思う。(中略)便利さを求めなくても、自然を活かせばこんなに誇れる生活ができるのだと気づかされた。(中略)先進国に居る人々にこういった考えをよいものだと思うせることは不可能に近いが、古きよきものはたくさんあるのだと知らせることはできる。<u>将来、たくさんの人々に古きよきものを知ってもらおう仕事や活動をしたかった。</u>バングラデシュは自然が豊で、文化が豊で、そういったものが人々の心を豊かにしている国だった。バングラデシュは豊かだった。	(前・中略)「受け継がれてきた空気」 「この国のたからもの」という現地で書いた最後のレポートには代々受け継がれてきた空気こそたからもの<u>だ</u>と書いた。自然や自然によって育まれた誇りによってつくられた<u>空気</u>というのは、たとえば、「なぜモスリムとヒンズーが共存できるのか」というと「生まれた時からその環境の中に暮らしていてそれが当たり前だから」という返事が返ってきた。シリー・カルディク・ナツさんの祖父の代から争いごとではなく、その空気を今でも保っているからだろう。<u>同時に伝統も次の世代へ橋渡しすることになる。</u>(伝統刺繍布も新しく布を買ってくるのではなく着古してやわらかくなった)母親のサリーでつくっていたからだこそだと思う。ノクシ・カンタ(伝統刺繍布)自体も母親がやっているのを見て自分も始めたと話していた女性にも会った。日本では伝統は人の生活の中にはあまり感じるができないかもしれない。(中略)物による豊かさのほかに、たくさんの豊かさをみつけた。<u>日本に帰ってきたら、人との関わりの楽しさや、いろんな人に興味をもって話かける気持ちを忘れるんじゃないか</u>と思っていた。(でもそれも自分次第)<u>私は、今回の研修で出会った人や、新しく知ったこと、「豊かさ」に対する考えの変化を大事にしたい。</u>(後略)
⑧ 3ヶ月後の ふりかえり	帰国してから多くの知人に、バングラデシュってどんなところ？ちゃんと生きていけるの？と聞かれますが、良い思い出しかなく、自然の豊かさ、文化の豊かさ、人びとの心の豊かさを語ってしまいます。(中略)(3年になってから履修している)授業で扱われる途上国の問題は、私たちが見てきた縫製工場や都市開発などと関係が深く、人権問題や環境問題など、日本と違う現実が多いです。もし、バングラデシュに行っていなかったら、「こういう国もあるんだなあ」と他人事のように思っていたと思います。でも、バングラデシュの縫製工場を見た女の子	帰国後してしばらくは思い出に浸るような日々が続いて、2週間で少し美化された感がある。帰国後「<u>バングラデシュで2週間過ごしました。</u>」という事実をどうとらえるか、どう変換するか、自分の中でどう処理するか、ということを何度も考えた。私は最後の(課題)レポートに、「日本に帰ったらバングラデシュで感じて考えたことも忘れてしまうのではないか」ということ、「それは自分次第である」とうことを書いた。だから、<u>そのため</u><u>の行動を起こしたいと思った。</u> そしてバングラデシュとの関わりを何かしら続けたいと感じた。(中略)「Because I am a girl」という

	たちの目を思い出すと、<u>真剣に向かわずにはいられなくなります。</u> これから私はこの経験を将来何に生かせるか考えています。ひとつ分かったことは、私は良い物を多くの人に伝えることが好きだということです。(写真を見返しながら)こんなに素敵なのがバングラデシュにはあるんだよ！と教えたくります。だから、自分が良いと思うものを、それをまだ知らない人たちに<u>広める仕事</u>をしようと思いました。(後略)	キャンペーンやアフリカ開発会議 TICAD のイベントに行ったり、STAND UP という団体のチラシをよく読んだり)実際に活動している学生がどれだけ(現地の)事情を把握して、それを支援する人がどんな状況を知っているのか、支援金の使い道や“支援した側の責任”についての理解がどれくらいあるのかという視点で捉えるようになった。「2 週間を過ごした」という事実を記憶し思い出すだけで終わりにしたくない。<u>私は次の経験につなげたいと思う。</u>いろいろな行動を起こして、<u>深く考えたりするきっかけと原動力になればいいと思う。</u>そうする気は満々である。帰国して私が思った今年の目標は「いろいろな人と話して(話をきいて、たくさん質問をして)、たくさんのことに興味をもって、たくさん試したい」ということ。だから、私は夏の(スペインへの)語学研修への参加を決めた。<u>バングラデシュの経験が、流されるだけの私から、意思を持った言動を実行できるようにしてくれたように思う。自分自身への可能性や視野が本当の意味で広がったように感じる。何度でも行きたい。もしショックな事実を見てしまったとしても受け止めて見つめることが出来ると思う。</u>
--	--	--

5. L の異文化体験

L(コミュニケーション学科2年)は、静岡県伊豆の出身で、静かで落ち着いた雰囲気のある学生である。在学中にヨガのインストラクターの資格を取り、駅前のヨガ教室で教えるというアクティブな面ももつ。2012 年 4 月のバングラデシュ研修の説明会には、同じ学科の友人 B の誘いで参加し、B の方はこの講義を履修しなかったのだが、誘われた L の方が参加することになった。「自分でもなんとなく参加したのに、こんなにも濃い体験が待っているとは思わなかった。電気も水も限られた生活だけれど、がんばって慣れていきたい。」と、L は研修の中盤、6 日目の UBINIG での夜のふりかえりで語っていた。

講義の志望動機にも自分で書いていたが、これまでは先進国の文化が好きで、途上国については全くの無知だったらしい。つまり、L は、バングラデシュは言うに及ばず、東南アジアについての予備知識もなく、まっさらであったのだ。

バングラデシュについては、美しい刺繍を施した民族衣装に憧れて参加を決意したようだ。動機作文には、民族衣装を着たいと書き、実際にそのように授業中でも発言していた。

そして、出発前の講義で、DVD『豊かさって何?』(17 分)

という K 女学園大学のバングラデシュへのスタディーツアーの記録を観ていたが、そこに登場していた農村女性の相互扶助グループ「ショミティ」の活発な貯蓄活動の様子を見て、「バングラデシュの女性は社会に出て頑張っていた。その輝いた様子に感動したので、早く会ってみたい。」と、期待を寄せていた。

実際の旅程では、「ショミティ」の女性に会う前に、農村の思春期の女の子達のグループ「キシュリ」の活動を訪問し、「キシュリ」の女の子との出会いで新鮮な体験をしたようだ。少々長い、その出会いについて初々しい報告を課題レポートに書いているので、引用する。

「バングラデシュに行く前、わたしがいちばん会うことを楽しみにしていたのが、キシュリの少女グループだった。彼女たちはわたしたちと同世代であるため、普段どんな気持ちで生活していて、将来の夢はどんななんだろうと、お話を聞くのを楽しみにしていた。3 日目の午後、ノルシンディー県 の地元 NGO・PAPRI を訪れてプロジェクトについてのレクチャーを受けた後、村を訪れてキシュリの活動を見学した。その時、女の子たちがとても元気で、はっきりと意見を述べていて、しっ

かりしていると感じた。同世代ではあるけれど、ほっとした。意志があつて意欲的だったからだ。キシユリの少女グループの前で、私は初めてベンガル語で自己紹介をした。(自己紹介用のベンガル語が書いてある)紙を見ているのに緊張して足が震えた。しかし、彼女たちは一生懸命わたしたちのつたないベンガル語を聞き取ってくれて、反応を示してくれた。嬉しくて私の緊張は解けた。

コミュニケーションをとるときに、わたしは「将来の夢はなんですか？」と質問した。その答えはわたしにとっては意外で、「先生」「医者」「看護師」「弁護士」など、一生懸命勉強してこそなれる立派なものばかりだった。もっと控えめであつたり、専業主婦だったりするものだと思っていた。全員の夢を聞いた後、自然と拍手してしまった。わたしも自分の夢に向かってがんばろうと、強く思った。全員で写真を撮るときに、わたしたちは初めて近くで触れ合ったり、コミュニケーションをとったりした。言葉はまったく通じないけれど、笑顔と握手で一瞬にして彼女たちと距離が縮まったような気がして彼女たちが好きになった。まだ、一緒にいたいと思えて嬉しかった。思えばこの時から、バングラデシュの人々のあたたかさを何度も感じたのだった。

というものである。

L が出会った、キシユリの女の子たちが話すベンガル語や肌の色、服装、披露してくれた歌や踊りなどを取り上げれば、それは異文化である。L も「自分とは違う何かに出会いたい。」と行きの香港空港で述べていて、異文化との出会いを期待していた。

しかし、私は思う。L とキシユリの女の子とは、日本人とベンガル人との違いがあれども、人と人としての出会いをしたのではなかったのかと。L は、キシユリの女の子の発言に自然と拍手をし、バーバルコミュニケーションは通じずとも、ボディランゲージでやりとりをして嬉しく感じた。キシユリの女の子たちの将来の夢に、若い同世代の女性としてインスパイアされたのだからこそ、L は、「私も自分の夢に向かってがんばろうと、強く思った。」のだと推察できる。このように、異文化の体験は、他ならぬ自分自身との出会いをもたらすものと言える。この時、L は、「自分の夢に向かってがんばろう、と強く思った」「自分」と出会ったのである。

そして、出会う者同士の異文化の度合いに差があればあるほど、自己や世界についての気づきは大きいのではないかと、考

えられる。

さらに、L は、トゥヒンさん宅でのワークショップの後、10 日目のふりかえりで強調しているように、「バングラデシュの女性は幸せなのであろうか？」と自分で問い、「一言で言えば、彼女たちは大変幸せだった。」と述べている。それは、PAPRI のシヨミティ(相互扶助グループ)に参加し、(普通の銀行は担保を持たない農村女性にはお金を貸さないで、NGO が行う)マイクロクレジット(小規模無担保貸付)でお金を借りて、子牛を安く買って成牛にまで育て高く売ったり、借りたお金を元手に、リキシャ(力車)を買って人に貸して貸し賃をとったり、村の雑貨屋を経営したり、畑の面積を増やしたり、夫の事業の資金の足しにしたりと、様々な方法で収入向上の事業を起こしている村の女性達と、4 日目午前に出会っていて、そこでの交流でそのような印象をもったようだ。課題レポートで、L は、「女性達は、みなはっきりと質問に答えてくれて、そこからは楽しさや誇りが感じられた。」と書いている。10 日目のふりかえりでは続けて、「(バングラデシュの村の女性達には)強い意志があつた。羨ましく思える程の笑顔で幸せだと言う。わたしももっと幸せになりたいと思った。私は私なりの最大限の幸せを手に入れて、幸せをみんなに分けていけたら最高だと思う。」と結論づけ、またしても、自分の将来についての強い思いに至っている。

さらに、L のバングラデシュ体験で、重低音のように響いているのは、古きよきものとの出会いである。それは、受講動機にも書かれた民族衣装への憧れに留まらず、伝統刺繍布を日常的に作るサティアントラ村の女性に出会ったこともあり、L の興味は、バングラデシュの生活文化全体にも広がって行ったようである。特に、ノクシ・カンタというサティアントラ村のあるジョソール県の特産品でもある伝統刺繍布が、着古され、ほつれのできたサリー布を何枚か重ねるために、日本で言うところの刺し子のように刺繍が施されるのを思い出したのか、または、UBINIG のあつたタンガイル県に伝統的に残っている(機械ではない)手織りのタンガイル織りも思い出したのか、12 日目のホテルでのふりかえりでは、「どんどん新しいものが産まれる(日本)社会で、古き良きものに触れることに目を向けて来なかったが、古き良きものを生産している(バングラデシュの)人々が誇りに満ちているのを見て、そういう人々の支えができる人になりたいと、強く感じた。(中略)(農村の生活文化の中に残る伝統的な知恵の見直しや伝統織物の復刻などの)目に見えない発展から目を背けてはいけないと思ったのは、新たな発見だった。」と、L 自身の気づきとして本人がしめくくっている。

そして、興味深いのは、課題レポートに書かれたLの言葉を借りれば、「バングラデシュの人々の生活の基盤である自然は、ベンガル人のみならず、私たちの心も豊かにした。」と言い、自然の豊かさを文化や心の豊かさを裏打ちする重要なものと見ていることである。課題レポートでも3ヶ月後のふりかえりでも、「古き良きものを伝えたり、広めたりする仕事に就きたい。」と、途切れることなく、繰り返して述べていた。「このバングラデシュへの研修に参加したことをどう活かすかのかを考えている。」とも、書かれているが、どういう仕事に就くのか、その方向性や具体的なイメージがL自身の中に育ちかけているのではないかと、私には考えられた。Lのように、20才の若さで途上国に行き深く異文化体験をするということは、その後の人生に与える影響は少なくないと、考えられる。

6. Mの異文化体験

M(国際交流学科 1年)は、大学生になったからには今までの自分からは脱皮したいという強い思いを持っていて、どちらかと言えばユニークな学生である。静岡県御殿場市の近くで生まれ育ち、大学ではスペイン語を頑張っている。また、疑問があって何か言い出せそうで言い出せない時や自分の想いが形にならない時は、授業中でもバングラデシュでも、いつも小さな口を尖らせていた。

Mは、往路で乗り換えた香港空港で「先生、羊の脳みそのカレーを食べたいのですが出るでしょうか？」とやおら私に聞いてきた。羊の脳みそとはずいぶんとグロテスクな趣味だと思ったが、Mは真剣であった。どうやら彼女は、出発前に、大学の先生やクラスメートに「食べてくる」と、吹聴してきたらしい。そして、その問い掛けは、引率する私を困らせたいという茶目っ気からだったのかもしれない。

いずれにせよ、Mの異文化の入口は、羊の脳みそだった。異文化体験への渴望ともとれるし、衝撃を受けて自分がどうなるのか試したいという気持ちともうかがえる。

それでも開講時の志望動機として、彼女は、「私は(2012年)4月の時点で、NGOなどの国際的な支援をしたいと考えてきたので、説明会にまず参加しました。(バングラデシュの)写真を見て、海外研修はとても濃密な時間を楽しく過ごせそうだなと思いました。写真を見るだけでなく、実際にバングラデシュでの生活や現地の人、音から空気まで感じたいし、物質的な豊かさだけでなく、生活の中の豊かさを多角的に見てみたいです。今は、異文化体験をしてみたいという思いが強いです。」と書き、

しっかりと明確な目的をもって研修に参加していたことがわかる。(その点は、友達に誘われて説明会に来たLとは対照的である。)

そして、「音から空気まで感じたい」という強い思いがあり、今思えば、羊の脳みそも、なるべく現地の人が食べるものを口にしたいという意味で、上記の「音から空気まで」の幅の中に入っていたのだろう、と推測できる。

また、Mは、「物質的な豊かさだけでなく、生活の中の豊かさを多角的に見てみたい」と書き、言葉の抽象度はまだ高いが、海外研修「アジアとの出会いと異文化体験」で筆者が意図するところの大テーマ、(途上国であるバングラデシュから逆照射される)「本当の豊かさとは何か?」について、初期の段階から十分に迫っていたことも伝わってくる。

Mの場合、「空気」という言葉が、彼女の異文化体験のキーワードとなっていて、ふりかえりや課題レポートにも多く出てくるので、注意して見ていこう。

まず、第一に、10日目のジョソールでのふりかえりでは、「(自分が住む横浜の住みにくさに対比させながら、)バングラデシュの村にある、人々の寛容な心とか、土地を愛する気持ちとか、和を保つための我慢とかが、すべて自然によって育まれたものであると、私は身をもって感じたので、そのパワーを再認識できた、証明できたと思う。」と、バングラデシュの村で接した自然のパワーにいたく感心している。

しかし、12日目のホテルでのふりかえりでは、一転、「バングラデシュの財産といえど何が最初に浮かんでいたか。今日のワークショップをする前だったら、「人々の笑顔」とか「自然」「文化」と言っていたと思う。確かにそれも大事だけれど、人々が受け継いできた「空気そのもの」だと私は思う。」と、自然や文化ではなく、「人々に受け継がれてきた空気」が財産だと、Mは言うのである。

他の参加者が絶賛していたりM自身でも10日目に自然のパワーだと感心していたりした、バングラデシュの自然や文化から一転して、バングラデシュの財産だとまで言う「空気」とは何であろうか?

開講時に「音から空気まで感じたい」と書いていた、抽象度の高い「空気」という表現とは、どうも異なるようなのである。

というのも、12日目のふりかえりでも、課題レポートでも、「この国のたからもの」というテーマの中で、空気について「人々に受け継がれてきた空気」と書いていて、「空気」は「自然」からそのまま生まれるものでなく、「人々が受け継いできた」

からこそ存在するものだと、M は考察している。「1 年 365 日この空気の中で生活すれば、そこにみあった国民が連鎖反応を起こしている」と書いていて、「人々の笑顔」や「文化」を支えているものは国民が連鎖反応で生み出している「空気」ということになるのだろう。

そしてその「空気」は、切り取って持って帰れないし、目にも見えない。そのあたりについては、M は、12 日目のふりかえりで、「日本に帰りたくないと感じるのも、バングラデシュの国民や生活の中に目に見えない魅力を感じているからだ。日本ではこの空気感を体験できない。」と書いている。

答えとしてこのような「空気」を発見するに至った「この国のたからもの」という主題は、M の中でオリジナルに湧き上がってきた主題である。私が示唆した覚えはないし、ワークショップや「ふりかえり」の中で他の学生の誰かが言ったことでもない。12 日目のワークショップの後のふりかえりをレポートに書き言語化する中で、M の中に生まれてきた表現だった。

しかし、「ブレイン・ストーミングをしてマインドマップを描くワークショップをしなかったらこの発想も生まれてこなかった」とも、M 自身は書いている。つまり、ワークショップは、体験を気づきに転換するために、意味があったということになる。

さらに、「この国のたからもの」である「空気」は、先述したように、人々(M の表現を借りれば「国民」)の連鎖反応によって醸し出されるので、それに浸ろうとするには、現地に居続けなくてはならない。しかしそれができないわれわれは、どうすればよいのか？

M は、「帰りたくないし、日本に帰ったらバングラデシュで感じたこと考えたことを忘れてしまうのではないかな？」と恐れたが、そのすぐあとに、「それも自分次第」であると思い直している。そして、「だから、そのための行動(現地に行った者だからこそ考えられる行動)を起こしたいと思った。」と、課題レポートでも 3 ヶ月後のふりかえりでも書き、行動を起こす意欲は満々であるとも書いている。実際、M は、2012 年 4 月に、援助に携わる仕事をしたいとこの研修の説明会に参加し、帰国後の 2013 年 3 月～5 月は、TICAD(アフリカ開発会議)の関連イベントに参加したり、世界の貧困をなくす STAND UP というキャンペーンにも参加したりしている。途上国との関わりの 1 つの形態フェアトレードにも疑問をもってしまい、援助のあり方、そして途上国との関わり方を考え、模索している。そしてとうとう、2013 年 2 月にバングラデシュに一緒に行った 6

人は、M の想いに共鳴する形で、2013 年 5 月 28 日、バングラデシュに関わり続けるための国際交流団体「カチャモリス・シヨミティ(ベンガル語で、青唐辛子相互扶助グループの意味)」を結成した。

つまり、「気づき」は、次に行動を起こすところまで、発展したのである。

以上見てきたように、M の場合、彼女の異文化体験は、「羊の脳みそ」から「村の人々に受け継がれる空気の感得」までと深く、その為、お仕着せの国際ボランティアではなく、また、現地に行ったことのある学生だからこそできる関わりを实践する径を歩き始めることになったのだと推察できる。

7. まとめ—異文化体験がひらく学生の気づき

異文化体験とは何なのであろうか？

L は、非常に素直に異文化と触れ合い、自己理解を進めていった。バングラデシュ体験が元になった、古き良きものへの気づきが、将来の仕事の選択へと可能性を見せる気配がある。

M は、強い想いをもって異文化に飛び込み、バングラデシュの財産は人々が受け継ぐ空気感にあると気づいた。そして、帰国時には次の行動を起こすことを宣言するまでになっていたし、何より、「バングラデシュの経験が、流されるだけの私から意思を持った言動を実行できるようにしてくれたと思う」と、自分自身が確実に変わったことを表明している。

2 人とも元々タイプの異なる学生であり、バングラデシュでは同じ体験をしているのだが、2 人は違う気づきに至った。異文化体験が強烈であれば自己や世界についての気づきも大きいだろうと推察されるが、気づきは、個々人によって独特であり異なるということもよくわかったであろう。

そして、強烈な異文化体験があったとしても、ただそれを感じ受けるのではなく、気づきがひらかれるには、体験をただ流れていくのに任せるのではなく、体験に楔を打ち込む機会としてのワークショップが重要な意味をもっていたと言ってよい。そして、ワークショップ体験が「ふりかえり」の作用を起こし、個々人の中で体験が言語化され明確な「気づき」となっていたのだといえる。

繰り返しになるが、それは、L の場合でよくわかる。彼女のふりかえりを見ていくと、<3 日目、思春期の少女グループ「キシュリ」>に会った後は→「自分の夢に向かってがんばろう」、<10 日目のふりかえり>では→「幸せをみんなに分けていけたら」、<12 日目のふりかえり>では→「古き良きものを生産し

ている人々の支えができる人になりたい。」、そして、帰国後 3 ヶ月弱後のふりかえりでは→「古きよきものを伝えたり、広めたりする仕事につきたい」と、体験は深く刻まれ、彼女の気づきはより具体化していったのである。

一方、M の方はというと、体験から経験の高みへと上っていったことがうかがえる。

<履修の動機>では「異文化を体験してみたい。」と書き、<12 日目のふりかえり>では「日本ではこの空気を体験できない」と書いていたのが、<3 ヶ月後のふりかえり>では、「次の経験につなげたい」と「経験」という言葉を使っている。次の経験は、2013 年夏のスペインへの語学留学につながったり、国際交流団体「カチャモリス・ショミティ」の代表になることにつながったりしていくのであるが、変化し成長するという意味で先が楽しみな学生である。つまり、M の場合は、バングラデシュ滞在中から日記も良くつけていたが、ワークショップによるふりかえりも手伝って、体験したことについて言語化を繰り返し内省する内に、体験は経験へとメタモルフォーゼ(変成)(*

4)されたのだと言える。

異文化に出会うだけでは人は成長しない。気づきがひらかれ体験が経験へと変成されるためには、体験の「ふりかえり」の重要性が指摘できよう。

(*)1) [http://data.worldbank.org/indicator/SI.POV.2DAY\(2010](http://data.worldbank.org/indicator/SI.POV.2DAY(2010)

(*)2) <http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/bangladesh/data.html>
(2001 国勢調査)

(*)3) 『「目に見えない豊かさ」を知って。アジアとの出会いと異文化体験ーバングラデシュの生活文化とフィールドワーク II 報告書』(フェリス女学院大学文学部コミュニケーション学科発行、2013. 3. 21)

http://www.be-winds.jp/wp-content/uploads/2013/05/ferri_s_bangladesh_hokokusho_0522.pdf

(*)4) 高橋勝、2007、『経験のメタモルフォーゼ<自己変成>の教育人間学』勁草書房、P. 2